

万葉集2230番歌の解釈について

竹生 政資¹, 西 晃央²

An Interpretation of the 2230th Poem in Manyo-shu

Masasuke TAKEFU, Akihiro NISHI

要 旨

万葉集2230番歌「恋ひつつも 稲葉かき分け 家居れば 乏しくもあらず 秋の夕風」はごく普通の易しい言葉を用いて詠まれており、少なくとも表面的にはまったく問題がないように見える。しかしこの歌の真意はほとんど伝わってこない。その最大の原因は、「(恋しく思いながらも) 稲葉をかき分けて家に居る」ことがなぜ「乏しくもない秋の夕風」につながるのか、その理由が理解できないことにある。

この歌は単独の歌として見る限りその真意を理解するのはきわめて困難である。これまでの先行研究結果がそのことを如実に物語っている。そこで本論文では、この歌の背景には当時すでに「古歌」として多くの人々に愛唱されていた額田王の488番歌と鏡王女の489番歌があり、2230番歌はこれらの歌をふまえて詠まれたことを明らかにする。このような手法は、後に新古今和歌集などでよく用いられる「本歌取」の先駆けとも言えるものである。

1. はじめに

この論文で取り上げる万葉集2230番歌は、巻十の「秋の雑歌」に分類された歌のうち「詠風」という題詞をもつ三首(2230番歌から2232番歌まで)の中の一詩である。まず歌の内容(訓読文と原文)を新日本古典文学大系本に従って掲載する[1]。

風を詠みき

10/2230 恋ひつつも 稲葉かき分け 家居れば 乏しくもあらず 秋の夕風

【原文】 恋乍裳 稲葉搔別 家居者 乏不有 秋之暮風

次に代表的な万葉集注釈書に掲載されている現代語訳と注釈を出版年の新しいものから順に掲載する。なお、記載形式をそろえるため内容に影響を与えない範囲内で順序や記号表記などを一部変更し、漢字の

¹ 佐賀大学 医学部 地域医療科学教育研究センター (takefu@cc.saga-u.ac.jp)

² 佐賀大学 文化教育学部 理数教育講座 (nishia@cc.saga-u.ac.jp)

旧字体は新字体で置き換えた。

①新日本古典文学大系^[1]

【現代語訳】家人を恋いながら稲葉をかき分けて小屋にいと、十分に吹いている、秋の夕風は。

【注釈】「稲葉かき分け家居れば」は、「稻田のほとりに仮屋を作つて居ればの意」(佐佐木『評釈』)。しかし、「ちよつとわかりにくい感がある」(澤瀉『注釈』)。「イナバカキワケは拙い誇張である」(『私注』)。「乏しくもあらず」の句、既出(一八二〇)。

②新編日本古典文学全集^[2]

【現代語訳】家を思いながら 稲葉をかき分けて 小屋にいと しきりに吹いている 秋の夕風が

【注釈】恋ひつつも——この恋フは、稲刈りの前後、一時的に自家を離れて自己の持田の周辺に小屋を造り、わび住いをする作者が、家人を思うことをいうのであろう。○家居れば——この家居りは短期間の小屋暮らしだが誇張して言ったのであろう。○乏しくもあらず——この乏シは少ない意。ただしトモシはトム(覓)から出た形容詞で、その対象に憧れ、羨望する気持の場合に限られる。ここに乏シクアラズとあるのは、夕風を満喫できて愉快だ、と言っているようだが、やせ我慢か戯れの気持があるのではないか。

③講談社文庫(中西進)^[3]

【現代語訳】家人を恋しくは思うものの、稲葉をかき分けるような小屋に住んでいと、十分に満足することだ。秋の夕風の趣に。

【注釈】風を詠める——秋にのみ見える。すでに秋風の情緒があることになる。○恋ひつつも——家郷に心ひかれはするものの一方。○稲葉かき分け——いおりの状態。○家——収穫時に作る田ぶせ。○乏しく——珍しく心ひかれる。

④萬葉集註釈(澤瀉久孝)^[4]

【現代語訳】家人に心惹かれながらも稲葉をかき別けその間に小屋を造つて住んでみると、稀ではないことだ。秋の夕風は。

【注釈】恋ひつゝも——考に「暑のまたのこれる時風を恋る也」といひ諸注も多くそれに従つてゐるが、古典大系本には「家人を恋しく思いながらも」とある。家をはなれて仮廬にゐて恋人に逢へぬ歎を詠んだ歌がこの先(二二四五、二二四八—二二五〇)にいくつもあるので、ここも次の二、三句につゞくものとして、家人に恋しく思ひつゝも、と解くべきであらう。

稲葉かき分け家居れば——田圃の間に家をつくることを少し誇張して云つたので、ちよつとわかりにくい感がある。

【考】前にあつた、

梅の花咲ける岡辺に家居れば乏しくもあらず鶯の声(一八二〇)

と似た形のものである。

古今六帖(一「秋の風」)「家ゐせば乏しくもあらじ」、柿本集(下)「秋の夕暮」、新続古今集(五)「家居して」柿本人麿とある。

⑤日本古典文学大系^[5]

【現代語訳】家人を恋しく思いながらも、稲葉をかき分けて田のほとりの小屋にいと、秋の夕風がしき

りと吹いてくる。

【注釈】 乏しくもあらず——しきりに吹いてくる。

さて、上にあげた五つの先行研究の問題点について整理しておこう。第一に、①から⑤の解釈に共通して言えることは、いずれも2230番歌を「単独の歌」として解釈していることである。④は1820、2245、2248—2250番歌などとの類似性を指摘しているが、これらは表現上または内容の部分的な類似性にすぎない。

第二に、①から⑤のいずれも第二句と第三句の「稲葉かき分け 家居れば」という表現がこの歌でどういう役割を果たしているのか、なぜこの表現が必要なのかについて十分納得のいく説明ができていない。この点に関して、①の注釈は『万葉集私注』（土屋文明）の「イナバカキワケは拙い誇張である」というコメントを引用している。しかし、もしこの表現が「拙い誇張である」ならば、万葉集の編纂者はなぜこのような拙劣な歌を収録したのだろうか。万葉集はある水準以上の歌だけを厳選して作られた歌集のはずである。このことは、例えば4327番歌の左注に「但し拙劣の歌十一首有るはこれを取り載せず」などであることからわかる。

第三に、第四句の「乏しくもあらず」という一見平易な表現についてさえ注釈書によって解釈に違いが見られる。①、②、⑤は「(秋の夕風は) 十分 (しきりに) に吹いている」、③は「(秋の夕風の趣に) 十分に満足することだ」と解しているのに対して、④は「(秋の夕風は) 稀ではないことだ」と他とはかなり異なった解釈をしている。

第四に、発句の「恋つつ」という表現に関する問題である。「恋つつ」は万葉集中に68例あるが（当該歌は除く）、以下の5例を除きすべて「男女の恋」（比喻歌も含む）に関するものである。5例のうち2例は男同士（3969、4347番歌）、3例は島や山や故郷などに対する思いである（862、1570、4412番歌）。このように「恋つつ」という表現はほとんどが「男女の恋」について用いられていることから、2230番歌の発句の「恋つつ」も「男女の恋」であることはほぼ確実である。①から⑤の解釈はいずれもこの歌の作者を「男」と見なし、田仕事のために家を遠く離れて仮小屋を作って住んでいる男が「家人」を恋しく思っ

て詠んだ歌だと解している。果たしてこの歌は「男」の歌だろうか。

2. 2230番歌の新しい解釈

先行研究結果が示すように、2230番歌は従来のようにこれを単独の歌として見る限り歌の真意を理解することは困難である。そこでこの歌を単独の歌と見ないで、当時の誰もが知っているある「有名な古歌」の内容を背景として詠まれた歌ではないかという視点から検討してみることにした。それでまず、この歌の重要なキーワードである「風」と「ともし（乏し）」を含む歌を万葉集からすべて探してみた。その結果、2230番歌のほかに162、489、1468、1607、4006番歌の5首があり、この5首の中で「ともし」が「風」との関連で詠まれているものに限定すると489番歌と1607番歌の2首だけで、しかもこの2首は原文表記に少し違いがあるものの訓読文は完全に同じ（いわゆる「重出」）であることがわかった。したがって、万葉集で「風」との関連で「ともし」という表現が用いられているのは実質的に489番歌と2230番歌の2首のみという結論になった。489番歌は488番歌と対をなす歌であるから、以下にこの二つをいっしょに示す（[6]、pp. 327-328）。

額田王の、近江天皇を思ひて作りし歌一首

04/0488 君待つと 我が恋ひをれば 我がやどの ^{すなれ} 簾 動かし 秋の風吹く

(大意) あなたのおいでを御待ちして、恋しい思いをしていると、私の家の簾を動かして、秋の風が吹きます。

鏡王女の作りし歌一首

04/0489 風をだに 恋ふるはとし 風をだに 来むとし待たば 何か嘆かむ

(大意) 風をなりと待ち恋うているとは羨ましい。風をなりと来るだろうと思って待つのならば、何を嘆くことがあるでしょう。

この二つの歌は、男が来るのを今か今かと待つ女にとっては風が吹くのさえ恋しく待たれる、という女心を詠んだものである。(少し強めの) 風が吹くと簾が動き、そのたびに「あの人が来たのかしら」と期待感を持たせてくれるからであろう。例えば、同じ一時間待つにしても、何の気配もなくただひたすら一時間待つのと、適度な間隔で風が吹いて簾を動かし、そのつど男が来たのではないかと期待しながら待つ一時間とでは、心理的に大きな差があり、後者の一時間の方がずっと短く感じられるというのであろう。

ところで、488番歌の作者の額田王は代表的な初期万葉歌人の一人である。彼女の歌は巻一の7番歌を先頭に、巻一に7首、巻二に4首、巻四に1首、巻八に1首、計13首がある。彼女が歌人として活躍した時代は天智天皇から天武天皇の時代にかけて、西暦で言えば660年代～680年代頃にあたる。488番歌の作者の鏡王女もほぼ同じ時代の人である。この二人の歌が後の人々に広く愛唱されたであろうことは、この二つの歌が巻四の相聞歌としてだけでなく、巻八の「秋の相聞」の先頭を飾る歌(1606、1607番歌)として「重出」していることからもうかがわれる。この重出に関して、武田祐吉氏は「同一の資料から出たものを誤つて重ねて載せたのであろう」と述べておられるが([7]、p.32)、以下に示すように原文表記にわずかな違いがあることを考えると、この重出は同一資料から出たものではなくむしろ別資料から出たものと考えべきであろう。以下に原文を示す。

04/0488 君待登 吾恋居者 我屋戸之 簾動之 秋風吹

04/0489 風乎太尔 恋流波乏之 風小谷 将来登時待者 何香将嘆

08/1606 君待跡 吾恋居者 我屋戸乃 簾令動 秋之風吹

08/1607 風乎谷 恋者乏 風乎谷 将来常思待者 何如将嘆

このように同じ内容の歌が微妙に異なる表記で「重出」しているという事実は、当時の人々に広く詠い継がれていたこの歌を文字として書き留めた人が、少なくとも二人、しかも「独立に」存在したことを示唆している。このことは、結果としてこれらの歌が当時の人々に広く愛唱されていたことを示唆している。でなければ、万葉集に異なる表記で重ねて収録されることはなかったであろう。

一方、2230番歌については、これが何時頃作られた歌であるかを知る資料はない。しかし、少なくとも488番歌と489番歌の時代よりも後に作られたことだけは確実である。というのは、2230番歌が488番歌と489番歌(およびその重出である1606番歌と1607番歌)よりも後に配置されているからである。このことは歌番号からもわかる。したがって、試みに2230番歌を奈良時代(西暦710年以降)の歌だと仮定してみると、先に示した額田王と鏡王女の歌は2230番歌よりも約30年以上も「昔」の歌ということになる。

以上の考察結果をまとめると次の三つに集約することができる。

- (1) 額田王の488番歌と鏡王女の489番歌は後の万葉人たちによって「古歌」として広く愛唱されていた可能性がある

- (2) 2230番歌は時期的に488番歌と489番歌よりも後に作られた歌である
 (3) 万葉集で「風」に関連して「ともし」という表現を用いている歌は2230番歌と489番歌の二首だけである

これら三つの根拠から、2230番歌は額田王と鏡王女の古歌をもとに詠まれた歌であろうと推測することができる。そこで、この推測のもとに2230番歌を解釈してみよう。まず歌の直訳を示す。

10/2230 恋ひつつも 稲葉かき分け 家居れば ^{ともし} 乏しくもあらず 秋の夕風

(直訳) (あの人を) 恋しく思いつつも、稲葉をかき分けて行くような家に住んでいますので、吹いて欲しいとも思いません、秋の夕風は。

この直訳は「単独の歌」としての解釈であるが、このままでは歌の意図が明確ではない。これに古歌(488番歌と489番歌)との関係を補足して意識すると次のようになる。

(意訳) 昔から488番歌や489番歌で詠われてますように、恋人が訪ねてくるのを待つ女は風が吹くのさえ心待ちにするとされていますが、私の場合は、彼が訪ねてくるのを恋しく待っている点では昔の歌と同じですが、私が住んでいる家は稲葉をかき分けて通うような場所にありますので、秋の夕風は吹いて欲しいとも思いません.... というのは、もし夕風が吹かなければ、耳を澄ませば遠くから稲葉をかき分けて彼がやって来るのを「少しでも早く」知ることができますのに、夕風が吹いているとザワザワしっぱなしで彼が来るのを知るのが遅くなりますから。

この歌の解釈の第一のポイントは「ともしくもあらず」の解釈である。「ともし」には次の三つの意味がある ([8], p.505)。

- ①少ない。とぼしい。貧しい。
- ②心が惹かれる。逢うこと・触れることが少ないために心が引きつけられる状態をいう。
- ③羨ましい。

この歌では「秋の夕風はともしくもない」という表現になっているから、この場合の「ともし」は上の②の「心が惹かれる」という意味にとり「秋の夕風は吹いて欲しいとも思わない」と解するのが歌の文脈にもっともマッチするであろう。

第二のポイントは、第二句と第三句の「稲葉かき分け家居れば」の解釈である。この部分は、もし前後の文脈を考慮しなければ、次の二つの解釈が考えられる。一つは「稲葉をかき分けて家に居ると(ので)」と解するもので、前節に示した五つの先行研究のうち①、②、④、⑤はこの解釈をとっている。もう一つは「稲葉をかき分けて通うような所にある家に居ると(ので)」と解するもので、③がこの解釈をとっている。後者の解釈では「稲葉かき分け家」を一つの名詞と見て、この文法構造を「稲葉+かき分け+家」と分解し「名詞+動詞の連用形+名詞」の形の複合名詞と考えている。上代語におけるこのような複合名詞の例として「におひうま=荷+負ひ+馬」(荷物を背につけて運ばせる馬)がある ([8], p.541)。現代語でも「人食いザメ=人+食い+サメ」のような例がある。この二つの解釈のうちいずれをとるべきかは歌の文脈による。先に示した直訳と意訳では後者をとった。

以上見てきたように、2230番歌は単独の歌としては解釈が困難であり、まったく別の場所に配置されたほかの歌（今の場合488番歌と489番歌）とあわせて解釈することにより初めて歌の内容を理解することができる。万葉集にはほかにもこれと似たような歌（984番歌）が存在する〔9〕。

最後に、この歌の「稲葉」に関して興味ある記事を紹介しておこう〔10〕（下線は筆者による）。

（前略）古代においては赤米こそが稲作の中心をなしていたものと考えられている。「恋ひつつも 稲葉かき別け 家居れば 乏しくもあらず 秋の夕風」と詠まれた稲は、現代の草丈の短い改良の進んだ稲の姿ではない。大人の背丈ほどに伸びる赤米の稲であってこそこの歌の風情である。赤米は悪条件でも育つ野性の稲の性質を色濃く持った稲である。実りの秋、籾の先端に生える芒^{のぎ}が極めて長く、しかもそれは真っ赤である。収穫された籾もまた赤茶色を呈しているが、出穂して赤い芒^{のぎ}を持った稲が一斉に風にそよぐさまは、現代の稲を見慣れた目には一種異様でさえある。

清少納言は太秦で「穂に出でたる田」を見て、「これは男どもの、いとあかき稲の本ぞ青きを持たりて刈る」と描いている。この稲とはまさしく赤米の稲の姿にほかならない。（以下略）

ここの記述にあるように、古代の赤米は現代米よりもかなり背丈が高いが、このことは下図からも確かめられる。この図は北部九州の代表的な装飾古墳として著名な福岡県嘉穂郡桂川町の王塚古墳に隣接する王塚装飾古墳館のすぐ北側にある古代米を撮影したものである。図の手前右下が古代米で、左手奥は現代米である。この図から古代米が現代米よりも明らかに背丈が高いのが確認できる。図中の古代米と現代米の境界線上の背丈の明確な「段差」がこれを示している。



3. おわりに

本論文では、従来のように単独の歌としては解釈が困難だった万葉集2230番歌について再検討を行い、この歌が額田王と鏡王女の「古歌」（488番歌と489番歌）を背景として詠まれていることを明らかにした。

2230番歌はこれらの「古歌」の知識なしには理解することができない。このように、当時の人々の間で愛唱されていた「古歌」の内容をもとに歌を詠む手法は、後に新古今和歌集などで一般化する「本歌取」の先駆けとも言えるものである。

最後に、本論文で示した解釈が妥当なものであるかどうか、多くの方々のご批判をおおぎたい。

参考文献

- [1] 「萬葉集二」、新日本古典文学大系、岩波書店、p. 520、2000年。
- [2] 「萬葉集③」、新編日本古典文学全集、小学館、p. 130、1995年。
- [3] 「万葉集原文付全訳注(二)」、中西進、講談社文庫、pp. 381-382、1980年。
- [4] 「萬葉集注釋卷第十」、澤瀉久孝、中央公論社、pp. 410-411、1962年。
- [5] 「萬葉集三」、日本古典文学大系、岩波書店、p. 129、1960年。
- [6] 「萬葉集一」、新日本古典文学大系、岩波書店、pp. 327-328、1999年。
- [7] 「増訂萬葉集全註釋五」、武田祐吉、角川書店、p. 32、1957年。
- [8] 「時代別国語大辞典上代編」、三省堂、2005年。
- [9] 竹生政資・西晃央、万葉集984番歌の「我が恋ふる月」の解釈について、佐賀大学文化教育学部研究論文集、第14集第1号、pp. 97-103、2009年。
- [10] 菊池昌治、「古典の食感④古代の色と味・赤米」、新編日本文学全集5月報40、p. 7、1997年9月。